

## 第31回全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会

A級蹴士認定無し 個人戦は組手又は型、1種目選択

看板種目 男子A級無差別級組手のヘッドギア着用

2020年8月3日

日本テコンドー協会

宗師範 河 明生

第31回全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会への出場意思が固い諸君は、必ず一読してください。

### 1、A級蹴士未認定無し

チャイナ・コロナ・パニック（下段、注参照）により2020年度予選会が実施できない状況である。

かかる現状では、A級蹴士（組手及び個人型の二種目参加が許される優秀選手）の認定が困難である。

また、練習量の十分ではないことから、組手試合における万が一の事故防止の観点から下記のとおりとする。

第31回全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会のA級蹴士認定はしない。

よって、個人戦参加は組手又は蹴蹴型のいずれか1種目とする。

ただし、上記の場合であっても団体戦型の参加は認める。

### 2、男子A級無差別級組手のヘッドギア着用

7月23日、7月総見時、倉田 剛と小川浩平との自由組手において倉田の後ろ回し蹴りが小川の顔面をとらえた。ヘッドギアが壊れ、小川の脛が切れ出血し、6針縫う怪我をした。

私が驚いたのは、怪我ではない。

何故、あの蹴りが顔面を直撃したかにあった。さほど鋭い蹴りではなかったからである。

小川は身体は小さいものの、テクニシャンであり、防御能力が極めて高い。

平時の小川なら防御できたはずが、受けることができなかつたのだ。

やはりチャイナ・コロナ・パニックによる組手不足がたたき、防御能力が落ちているのだと観じた。

我が武道歴約46年。

長年にわたり熟成されてきた「武道的大局観」と「勝負勘」が敏感に反応している。

「果たして防御能力が落ちているのは小川だけなのか」と。

確かに、我が全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会の看板種目は、男子A級組手無差別級である。

その醍醐味は、ノーヘッドギアである。

第13回全日本FT大会から第30回全日本FT大会迄、18年間、持続してきた組手スタイルである。

しかし、現在、世界中が予想だにしなかつた疫病パニックの渦中にある。

この状況下では、何人も選手の組手不足に伴う防御能力低下を非難することはできない。

他方、全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会主宰者=河には安全性を高める責務がある。

仮に強烈な蹴りが顔面を直撃したとしても、大怪我をしない配慮が不可欠であると観じ、次のように定める。

第31回全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会に限り、男子A級組手無差別級はヘッドギアを着用するものとする。

男子A級組手無差別級参加者は、  
ヘッドギア着用時の防御的視覚を十二分に研鑽すること

注意 チャイナ・コロナの呼称について

疫病の名称につき特定の国や民族等を冠すると差別につながるとし、控えるという「紳士協定」がある。

私自身、差別や偏見にさらされるマイノリティであり、そのような不義と戦ってきた経験をもつから、国や民族に対する差別には反対である。

「チャイナ・コロナ」という呼称を使用したとしても、中国人に対する差別や偏見には反対である。

また、私は、中国の文化（孔子、孟子、孫子の兵法等）や歴史（司馬遷の史記、十八史略等）を尊敬している。「河」という氏族は、中国の氏族「何」の末裔だという説もある。中国および中国人に対する親近感がないわけではない。

だが、今回の疫病は、未曾有の死者を出している。未曾有の不況をもたらしている。

この疫病は、中国武漢で発生し、中国人によって世界中にばらまかれたことは周知の事実である。

しかし、中国共産党政府は、世界の被害者に対し謝罪すらしていない。

他方、主要先進国は、中国に対する損害賠償請求（兆を超える単位の天文学的な金額）訴訟を準備しているが、中国が払うことはない。

さらに、新型コロナ・ウイルスという名称は、いずれ意味がなくなる。

数年後、「新型」ではなくなるからである。

「コロナ」という名称は、特定のウイルスをさす名称ではないからである。

私は歴史学者でもある。

今回の疫病につき、歴史の教訓として後世に記憶させるべきだと考えている。

未曾有の病死者を出した中国共産党政府は、道徳的責任を歴史上、永遠に負うべきだと考えている。

そのため2020年初頭に発症し世界中に拡散した疫病の名称は「チャイナ・コロナ」が適切だと考え使用している。